



田 中 拓 未
サロンコンサートシリーズ in
わたなべ音楽堂
Vol.53
SALON KONZERT SERIE

P R O G R A M M

2019年 1月27日(日) 14時半
わたなべ音楽堂

第 53 回サロンコンサートシリーズ

～変奏曲集～

2019年1月27日(日) 14時半 わたなべ音楽堂

田中 拓未：ピアノ

プログラム

J. ハイドン (1732~1809)

変奏曲 ヘ短調 Hob.XVII:6 (1793)

Variationen f-moll Hob.XVII:6

L.v. ベートーヴェン (1770~1827)

ピアノソナタ 第 30 番 作品 109 (1820)

Sonate für Klavier Nr.30 Op.109

I. ほどよく快活に

II. 速く

III. ゆっくりと とても内省的によく歌って

J. ブラームス (1833~1897)

ヘンデルの主題による変奏曲 作品 24 (1861)

Variationen über ein Thema von Händel Op. 24

ご挨拶

本日はお忙しい中をご来場くださりありがとうございます。本日は変奏曲をテーマにしてお届けいたします。取り上げた作品は典型的な変奏曲ではなく、その進化形といえるものです。どうぞ最後までゆっくりお楽しみください。

プログラムノート

ハイドンは1732年生まれであるから、時代区分としてはバロックと古典派をまたぐ存在といえる。生涯に62曲のピアノソナタを残し、ピアノソナタの典型的な形を作り上げた。ハイドンはまた、モーツァルトやベートーヴェンの師匠でもあった。後進であってもモーツァルトの歌劇にはとりわけ敬意をもっていた。モーツァルトの歌劇「魔笛」はハイドンがのちにオラトリオ「天地創造」を創り上げるモチベーションにもなったと考えられる。モーツァルトの死後、話題がモーツァルトになると涙ぐんでいたという逸話もある。1793年作のアンダンテは悲しげな葬送行進曲を思わせるリズムで始まるが、数年前に死去したモーツァルトのことを思い出して弾いていた姿が想像できる。

ベートーヴェンの第30番のソナタは1720年の作であるが、この年ベートーヴェンはこの曲以外に曲を作っていない。静かに内観する時間だったのだろうか。第3楽章は変奏曲になっている。テーマの素材(左右のメロディーの音程やリズムなど)、を第1、第2楽章に織り交ぜている。そして曲の最後にふたたびテーマが繰り返される。

19世紀には宗教が芸術の題材にもなった。メンデルスゾーンのバッハ復興の活動がその代表的な例だが、さらにバロック以前の宗教曲を専門にするグループも存在した。ブラームスは女声合唱の指揮をしていた時期があり、この時期に合唱曲が作曲された。それはパレストリーナなど古楽の研究の成果でもあった。また、ブラームスはバッハ、ヘンデルなどのバロック音楽の研究も行った。当時発表されたヘンデル全集を買い求めている。ヘンデル変奏曲はヘンデルのクラヴィーア曲集の中のアリア(この曲も変奏曲になっている)を主題にして35の変奏と壮大なフーガで締めくくられている。ブラームス自身も若い頃はピアニストとして活躍し、度々この曲を演奏している。

次回予告

田中拓未サロンコンサートシリーズ 第54回<ピアノリサイタル>

～バッハ、ベートーヴェン、シューマン～

2019年 2月24日(日) 14時半 わたなべ音楽堂